



# 苦ヶ島

笑福亭 松鶴

エ、一席伺ひます。世は呪ひ加持祈禱と申しますが、随分昔は呪ひを喧しう申しまして、痺れが切れると額へ墨のいゝを細かう切て張りつけるとか、目ばちこが出来ると井戸へ箆を覗かすとか、そら手が起きると末の子に小指を括つて貰ふとか、鼻血が出たら首筋の毛を三本抜くとか種々呪いがムりましたが、當節は人間が豪う理屈臭うなりまして餘り斯う云う事は流行らぬ様になりました。何事も昔と今は大違ひで、唯今はどんな豪いお方でも手軽に汽車に乗て旅行にお出かけになります。従前は大層な行列で繰り出したものでムりますが此の大名の行列は毎年京都の平安神宮の十月の御祭禮には時代祭と申しまして、今日に至る迄京都のみそと成つて行列を拜見出来ます。儲て是は紀州の御

先祖紀伊大納言源の頼宣公……御三家の中でもぱりぱりで羽振の利いたお方で御座居ました。江戸表から郷地へ御入國と云ふので東海道五十三次を次第くとお上りに相成りましたが、如何大名でも大津から蹴上までお出ましに成つて京都へは入らずに蹴上から竹田街道を伏見迄お出ましになる。其の日は枚方宿泊。翌日は枚方から泉州岸和田岡部美濃守様の御領分で御一泊。明けて翌日は御領國へ御入城と斯う云ふ途中の順序になつて御座居ます。サア御殿様の御歸國と云ふので本町筋は町役人が出まして疏忽があつてはならんと云ふので皆なそれくの警護が出張つて居ります。尤もお町人衆のお宅では金屏風、或は幕を張り詰めまして柄長の杓には柄長の手桶盛砂などが仕て御座ります。程なく御通行と云ふ事になりますと兩側には拜觀者が藪を敷いて座つ居りますし、辻々には繩を引き前へ出ぬ様に番人が附いて居ります。町役お年寄が紋付羽織袴で出て居ります。

「ハイ、何方も御殿様に疎忽の無い様になされや。」

「へエ、旦那さん御苦勞さんでおます。」

「ハイ、疎忽の無い様になされや。」

「オイ、痛い〜押ししたら痛いと云ふのに、無茶をすない脊中に灸がすへたあるのに押したらつぶれるがな。」

「知らんよつてに押したんや。」